

「出会い系サイト」の変遷

パソコン通信、テレクラ、伝言ダイヤル、ダイヤルQ、ポケベル、インターネット、携帯電話…

富田英典

佛教大学教授

はじめに

「インターネット異性紹介事業を利用して児童を誘引する行為の規制等に関する法律案」（出会い系サイト規制法案）が2003年（平成15年）9月13日から施

行された。ただ、今回問題になっている「出会い系サイト」に類するものは、以前から存在していた。本稿では、それらのメディア上での出会いの変遷をたどりながら、その姿を明らかにすることを目的とする。ここでは、代表的なものとして、パソコン通信、テレクラ、伝言ダイヤル、ダイヤルQ、ポケベル、インター

ネット、携帯電話を取り上げることしたい。

80年代の初め…パソコン通信と「パソコン婚」

80年代の初めに、パソコン通信が一部の人々の間で人気を集めていた。それが



一般に普及するのは、86年にPC-IVAN (NEC) が開局し、翌年にニフティサーブが開局してからである。ただ、大幅に利用者が増加するのは、90年代になってからであり、ニフティサーブの場合は、93年5月末に会員数が50万人に達し、95年4月には100万人を突破している。

その後、入会者数はさらに急増し、96年1月に150万人に達している。その年のニフティサーブには、570を超えるフォーラム、190店舗以上のオンラインショッピング、国内外約1350のデータベース等があり、ニフティサーブはまさに日本最大規模の商用オンラインサービスとなった。

このパソコン通信で人気があったのが掲示板と会議室であった。そこでは、見知らぬ者同士が、それぞれが自分の趣味や興味関心にしたがって、意見を交換したり、おしゃべりをしたりしていたのである。そこで知り合い結婚するカップルも登場した。それを当時「パソコン婚」と呼んでいた。ただ、当時はまだパソコンを

購入している家庭は少なく、パソコン通信は限られた人々の間で利用されているに過ぎなかった。

80年代半ば：「テレクラ」新しい電話ナンバ

テレクラ（テレホンクラブ）は、80年代半ばに登場した。男性は1時間3000円前後の料金を支払い、個室で女性からの電話を待つ。女性はフリーダイヤル（0120）を利用して電話をしてくれる。女性からの電話がかかると全室の電話が一斉に鳴り（実際にはランプが点滅する）、最初に電話をとったお客につながるというシステムである。ただ、このような「早取り制」から、その後は早く部屋に入った客から順番につながる「順番制」にかわる。一般の女性は、街頭で配布されているティッシュ広告や雑誌広告をみて電話をしてくれる。ただ、女性からの電話が少ない場合に備えて、いわゆる「サクラ」と呼ばれる女性が、一般の利用者のふり

をして電話をする場合があった。

テレクラの場合は、男性客は女性と電話で話をしたあと、会う場所と時間を約束する場合が多い。したがって、電話をしてくる女性がテレクラの近くから電話をしている必要がある。このように電話によるナンパが目的ではあるが、ただ会う場所と時間を約束するためだけに電話が利用されているわけではない。電話での会話がはずまなければ、会う約束はできない。しかも、時間をもてあました女性が暇つぶしに電話をしてくれる場合も多く、実際に会う時間と場所を決めても本当に女性がやってくるとは限らない。

86年：伝言ダイヤルの魔力

NTTの伝言ダイヤルサービスが開始されたのは、1986年であった。それは、駅の伝言板のように、電話を利用する目的で開始されたサービスであった。利用方法は、伝言ダイヤルセンターに電

話をして、6桁から10桁の連絡番号と4桁の暗証番号をダイヤルしメッセージを録音したり再生したりできるのである。全国どこからでも利用でき、携帯電話やポケベルが普及する以前では、便利なサービスであった。ただ、誰でも思いつくり123456等の番号がオープンダイヤルとして、見知らぬ人にメッセージを送る手段として利用された。自分の想いを録音すると、見知らぬ別の人がそれに答えて次々にメッセージを入れるというリレーダイヤルや、交際相手を募集するメッセージを録音する伝言ナンバダイヤルも登場したのである。この伝言ダイヤル方式は、その後、ダイヤル²Qやテレクラでも利用されることとなる。

89年：社会問題になったダイヤル²Q

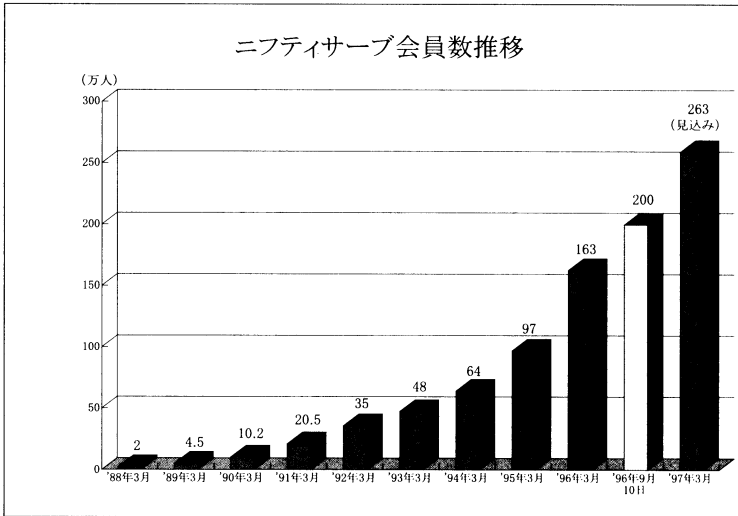
1989年、NTTのダイヤル²Qサービスが開始された。それは、すでにアメリカで900番サービスとして始まっ

ていた情報料回収代行サービスである。

有益な情報を有料でも簡単に提供できる電話サービスであり、情報料は、通話料と一緒にNTTが回収して情報提供者に支払ってくれるので、利用者は手軽に利用でき、情報提供者にとっても便利なサービスであった。そして、このダイヤル²Qを利用して様々な番組が登場した。その中で最も人気を集めたのが「ツーショット」と「パーティーライン」であった。前者は、見知らぬ男女が電話でデートができる番組であり、後者は数人の男女が電話で自由におしゃべりができる番組である。「ツーショット」の場合は、男性は「0990」で始まるダイヤル²Qサービスを利用して電話をかけ、女性は「0120」で始まるフリーダイヤルを使って電話をかけてくる。これらの番組は、自宅から簡単に利用できるために爆発的な人気となった。また、アダルト音声を流す番組やテレクラ業者がダイヤル²Qを利用するケースも登場した。ただ、「ツーショット」の場合は、全国どこか

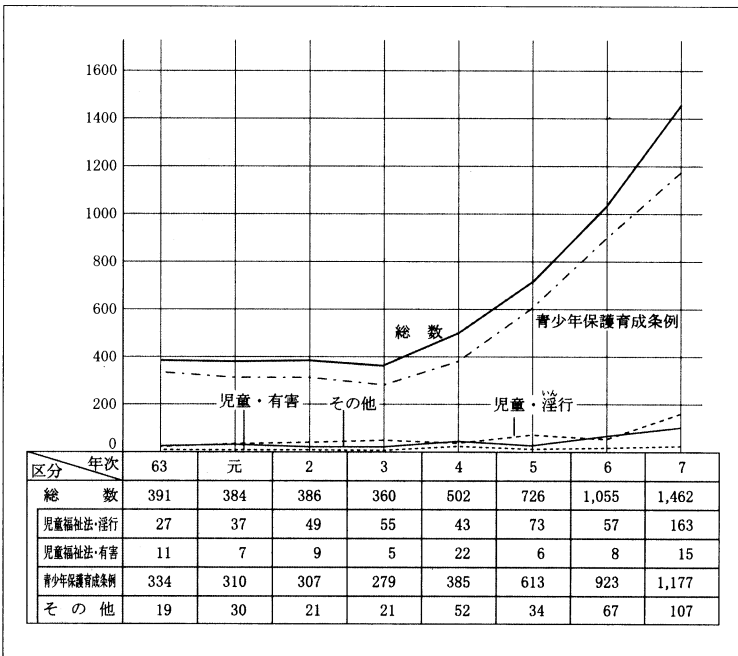
ら利用しても「0990」で始まる番号であるために、遠く離れた人とながつてしまうことも多く、ナンパに適していたわけではなかった。したがって、当初はただ電話でおしゃべりをするためだけに利用される場合が多かった。特に、「パーティーライン」の場合は、ナンパが目的ではなく、見知らぬ者同士が自宅から電話でおしゃべりをするだけの井戸端会議であった。ただ、通話料と一緒に請求される情報料が高額であり、人気の「ツーショット」の場合は、通話料と情報料あわせて4・5秒から6秒で10円になる場合が多かった。そのため高額な料金が支払えず自殺した事件、ダイヤル²Qに夢中になった息子を父親が殺害する事件などが続発した。また、「パーティーライン」で知り合った男性に女子高生が乱暴をされた事件、デートクラブ業者が「ツーショット」を利用するケースまで登場した。その結果、91年6月にNTTは「ツーショット」番組の新規申し込み受付を中止し、10月1日以降は既存「ツーショ

図 1



<http://www.nifty.com/corp/release/19960918-2.htm#1>

図 2



出典：平成 8 年警察白書

<http://www.pdc.npa.go.jp/hakusyo/h08/h080202.html>

「ネット」番組の契約更新を中止、「パーティーライン」に関しては、92年4月から情報料の上限を5分の1に下げること

発表した。これによって、「ツーショット」と「パーティーライン」は姿を消すこととなった。また、ダイヤルQを利用し

た「伝言ダイヤル」が登場していたが、これも廃止が決定し、94年2月に姿を消したのである。

90年代初め…第2次テレクラブーム

NTTのダイヤル²Qサービスが始まり人気を失っていたテレクラが、ダイヤル²Qの「ツーショット」「パーティーライン」「伝言ダイヤル」が規制されるとすぐに復活し、第2次のブームを迎える。ただ、従来は店舗型テレクラであったが、この時代には無店舗型テレクラが登場する。ダイヤル²Qで人気を集めた「ツーショット」は、当時「自宅テレクラ」と呼ばれていたが、料金の回収方法をダイヤル²Qではなく、銀行振り込みや街中に設置した自販機でカードを購入させる方法に変更したものが、無店舗型テレクラである。自宅から簡単に利用できたダイヤル²Qの「ツーショット」や「パーティーライン」とは違って、わざわざ料金を支払う手続きをしなければならぬ無店舗型のテレクラの場合は、ナンパ目的の利用がそのほとんどとなる。

その結果、いわゆる援助交際に利用されているとして、未成年者の利用を規制するために各都道府県でテレクラを規制する条例が制定されるようになる。95年10月に岐阜県で制定された「テレクラ営業規制条例」を皮切りに、全国の都道府県と同様の条例が制定された。そこで問題となったのが無店舗型テレクラであった。店舗型テレクラの場合は、青少年が店舗へ入室することを規制することができるが、無店舗型テレクラの場合はそれができない。そこで、無店舗型テレクラを利用するためのカード購入機と広告の規制が実施されたのであった。

90年代半ば…新しい友達「ベル友」

ポケベルのサービスが始まったのは、1968年であった。当初は、ビジネスマン向けの通信機器であったが、その後、機器の開発が進み、96年に発売されたポケベルで数字を文字に変換して12文字ま

での短文が受信できるようになったのをきっかけに、女子高生を中心にポケベルが大流行することとなった。そして、そんな一方通行の通信機器であるポケベルを利用して、見知らぬ人とメッセージを交換する現象が生まれた。いわゆる「ベル友」の登場である。

そこには、ダイヤル²Qのシステムもテレクラ業者も介在していない。小さなポケベルにメッセージを打ち合うだけである。しかも、ポケベルは持ち歩いているために、「いつでも」「どこにいても」メッセージを受信することができる。「ベル友」からメッセージが届くと近くの公共電話からプッシュボタンを押してメッセージを返信する。すると、すぐにまた相手からメッセージが返ってくる。「おはよう」「元氣?」「なにしてるの?」といった簡単なメッセージ交換ではあるが、続いているうちに友情が生まれたり、場合によっては恋愛感情が芽生えたりすることもある。見知らぬ人との出会いが風俗産業に絡めとられることなく、自分た

ちの世界の中で生まれだした現象と言えるだろう。また、ポケベルは常時携帯しているため、それまでの同種の現象よりも直接的であった。

90年代後半…インターネットと「メル友」

インターネットは、1993年に商業利用が開始された。そして、95年にマイクロソフトが「ウインドウズ95」とともに「インターネット・エクスプローラー」を提供し、インターネット人口は増加した。わが国では、商業利用開始以来わずか5年間でインターネットの世帯普及率が10%を超えた。96年にはインスタント・メッセージの定番であるICQが登場し、97年には3大ポータルサイトのひとつであるAOLでインスタント・メッセージヤーが会員に配布された。その後、残りのポータルサイトでも、MSNメッセージヤー、ヤフーメッセージヤーが登場した。また、各ポータルサイトに

は、それぞれチャットルームがあり、多くの人々がそれぞれの趣味や年齢に合わせた部屋でチャットを楽しむようになった。

98年にはトム・ハンクスとメグ・ライアン主演の映画『ユー・ガット・メール』が封切られ、テレビでは『WITH LOVE』近づくほどに君が遠くなる』が放映され、インターネットが取り結ぶ新しい恋の形が話題となった。そして、このようなインターネットのeメールを介して成立する友達は「メル友」と呼ばれたのだった。

2000年…ケータイ「出会い系サイト」

NTTドコモのiモード・サービスが開始されたのは1999年であった。その後、各携帯電話会社の機種からもインターネットが利用できるようになった。

そして、様々なデジタルコンテンツが携帯電話向けのサイトに登場した。その中

に「出会い系サイト」と呼ばれるものがあった。インターネットのコンテンツで最も収益が高いものが「出会い系サイト」であると言われている。携帯電話からのインターネット利用に関しても、「出会い系サイト」が人気を集めるのは当然の結果であった。

ただ、それらは「チャットルーム」で見知らぬ人と知り合って友達になるというスタイルではなく、いわゆるマッチング・サービスであった。インターネットの出会い系サイトには、年齢や性別、住所などを入力し、好みの相手を検索するサービスがある。今では、各ポータルサイトが無料で同種のサービスを行っている。携帯電話の出会い系サイトも基本的には同じであり、条件をいれるとそれにあつた相手のメッセージを表示してくれる。その中から、気に入った人へメールを送信するのである。携帯電話の出会い系サイトの場合、料金は1ヶ月300円前後である。この出会い系サイトを利用して知り合った青少年が事件に巻き

込まれるケースが問題となり、冒頭で紹介した「出会い系サイト規制法案」が制定されることとなった。

ただ、「いまひまサービス」(イマヒマ株式会社)などの新しい「出会い系」サービスも次々に登場している。また、携帯電話の「出会い系サイト」は世界中に広がりがつつある。それぞれの国で、見知らぬ人との出会いに対する感覚が異なっている。また、インターネットの普及によってわが国における「出会い系サイト」に対する考え方も変化していくことになるだろう。

まとめ

出会い系サイト規制法案が施行されたが、異性紹介事業は、利用者の自由な出会いの場を提供しているだけである。そして、本稿で取り上げてきたように、「出会い系サイト」に類するものは、パソコン通信の時代から姿を変えながら途絶え

ることなく存在している。それが社会問題となった理由のひとつは、未成年者による利用にあった。見知らぬ人との出会いは、刺激的である。ただ、どの誰かも分からない人である以上、みんな警戒するはずである。そんな警戒心を解いてくれるのがメディアの匿名性である。実際、メディアを利用してはいる限り危険はない。問題は、知り合った人と実際に会う場合である。それが危険なのは、メディアではなく、見知らぬ人が行きかう都市空間が危険だからである。

むしろ、様々な規制が行われてきたにもかかわらず、匿名性の上に成立する親密性に人々が魅了されてきたという事実を目を向ける必要がある。私はそんな見知らぬ他人を「インテイメイト・ストレンジャー」と呼んできた。このメディアの匿名性上に成立する新しい人の絆は、私たちの日常生活の中に組み込まれることになるかもしれない。むしろ、そうしなければ、もはや実質的な意味で、これからの青少年の健全な育成を考えること

は困難な時代が始まっているのである。

【参考文献】

- 櫻村政則編著『伝言ダイヤル』の魔力―電話狂時代をレポートする―(JICC出版) 1998年。
- 岡田朋之「伝言ダイヤルという疑似空間」『現代のエスプリ』第306号 93頁-101頁、1993年。
- 富田英典『声のオデッセイ―ダイヤルQの世界・電話文化の社会学―』(恒星社厚生閣) 1994年。
- 宮台真司『まぼろしの郊外―成熟社会を生きる若者たちの行方―』(朝日新聞社) 1997年。
- 富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦『ポケベル・ケータイ主義!』(ジャストシステム) 1997年。
- 藤本憲一『ポケベル少女革命―メディア・フォークロア序説―』(エトレ) 1997年。
- 岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』(有斐閣) 1992年。
- 加藤晴明『メディア文化の社会学』(福村出版) 2001年。